

沖縄文化地域における民家の塑形的モデル

——試論として——

渡 辺 欣 雄

1、未完成の完成にむけて

本稿は、昭和四十七年十月十四日に行なわれた、南島史学会第一回大会において、研究発表を行なったものである。数ある南島の諸研究を一つの学会に集約し、学際的内容を保持しようとするには、とりわけ南島研究に関する大きな展望と野心とが備えられなければならない。筆者の発表には、なお不十分をまぬがれたいものがあつたが、この大きな目的のため、大胆とも思われる試論を披瀝したのである。

発表から七年を経た今日、本稿にも優る論文がすでに幾つかみられることは、欣慶このうえもないことである。⁽¹⁾ 世界観研究の興隆をみる今日においては、本稿はその新鮮味を失っているが、現在の研究の趨勢とともに、筆者の研究が多少ともその流れに寄与したものであるとすれば、その責任において発表当時の意図を書き留めておく必要があると考

る。そこで本稿は、発表レジュメをもとになるべく発表当時の内容と事例をそのまま載せることにし、説明不十分のところは詳説し、その後の諸兄の指摘を明確にして、本文または注に載せることとした。諸兄の指摘から生じた問題点、筆者の抱いていた問題点は、今後にも及ぶ課題であり、本稿の意図する△未完成の完成に向けて▽、あらたな問題を提示してみたい。

なお刊行年次は前後するが、本稿の成果の一部は、拙稿共著「奄美」(1973a: 159—160)、『および『宴』(1975: 23—25)に発表しておいた。本稿の前身である筆者の沖縄世界観研究(1971a: 85—108, 1971b: 10—30, 1973b: 195—217, 1978: 250—275など)とともに併せ参照された。

II、本論の対象領域

本論では、まずその対象地域を「沖繩文化地域」Okinawan cultural area と称し、まずは奄美から与那国島にかけての領域として一括する。その理由は、経済制度・社会制度・言語体系・価値・宗教理念などにわたり、ひとしく首里・那覇を中心とした琉球王朝の国家的影響の及んだ最大の領域であり、相対的に独自の生活様式をもつ文化領域である、という設問上の前提があるからである。このような前提は、言語文化の問題（平山輝男 1968：7—11）、民族史上の仮説（比嘉春潮 1970：31）ばかりではなく、社会組織に関する課題の範囲（中根千枝 1962：6、馬淵東一 1971：3など）、沖繩文学の対象領域（外間守善 1971：111）その他多くの学問分野にわたる研究がひとしくこれを指摘するところである。この沖繩文化地域は、したがって、先学の用語にいう「沖繩」「琉球」「南島」「南西諸島」「琉球文化圏」「琉球文化圏」等々にほかならない。そこでこの「沖繩文化地域」が、いかに「文化的単位」として、独立した「文化体系」を保持するものであるか、多角的な事例の比較研究が、将来必要とされるであろう。

しかし、ここで確認しておかなくてはならないのは、具体的な島嶼は、前述したようにあくまでも相対的に考えておかなければならない、ということである。多くの設問は、奄美大島から与那国島の領域内で解決のつくことであるが、個々の問題にたち至った場合には、必ずしもその領域が有効なものとはなりえないからである（cf. 平山輝男編 1969：諸分布地図）。「俗間地理学」すなわち人びとの主観認識の世界では、与

那国島と台湾の間には一応の境界線を引くことができる（cf. 馬淵東一 1952：394—399）し、これを文化上の境界線として策定しうることも筆者の調査であきらかであるが、⁽²⁾ 個別的な文化要素をとりあげ、さらに、インドネシア下部文化層 Indonesian substratum (Lebra 1966：11) として前記の境界線をとりはらうことも可能であろう。逆に奄美大島とカラ列島間に存在する文化の境界線も、個々の文化要素をあげて比較すれば、必ずしも固定したものにはならなくなる。事実、与論島から種子・屋久地方にかけての、いわゆる「薩南諸島」は、これまでの研究が示すところ、沖繩と大和（本土）との両文化の漸移地帯であり、個別文化の境界は幾重にもこの諸島上に平行してあらわれている。

要するに、「沖繩文化地域」の問題は、「境域」region の問題ではない。問題は、J. H. Steward の指摘にしたがえば、沖繩文化という、ある一定の社会文化的統合を示す「文化型」culture type の問題なのであって（cf. Steward 1955：80）、境域ではないのである。境域の伸縮・増減はありえても、沖繩文化として一括しうる文化要素の共通項が問題であり、のちに述べるように、であるからこそ、ダイアグラムは、沖繩文化を代表せねばならないのである。地域に還元してこれを考えるならば、設問上の「沖繩文化地域」とは、沖繩と大和、沖繩と朝鮮、沖繩と台湾、沖繩と中国、沖繩と太平洋諸島、等々の二極にわたる比較の単元としてまず想定されなければならない。かつまた比較の対極として、学術上の「独立」が容認されうる内容を保持した地域として考えなければならない。そのように認めたらうと、「沖繩文化地域」が、つぎには個

別文化の分析にとつてどこまでなのかを考えなければならない。

メルクマールいかによつては、沖繩文化の単元を越えて「ヤポネシア」と呼びうるかもしれないし、「インドネシア下部文化層」に含められ、あるいは「漢字文化圏」とも、「東洋」とも、「西太平洋社会」とも呼びうる圏内に一括されるかもしれない。つまりは《相対的》なのである。しかし、ここで認識しておかねばならない重要事項は、一村一島嶼の問題はともかくとして、およそ「沖繩」を論じ、「琉球」を語るのなら、どこまで、そして何が「沖繩」であり「琉球」であるのか、設問の対象領域を明確にしておかなければならない、ということである。たとえば、「沖繩」を論ずるならば、なぜ与那国までをふくめるのか、の反論を覚悟しなければならないであろうし、「琉球」を論ずるならば、なぜ台湾をもふくめないのか、の反論を覚悟しなければならないであろう。

《民家》に関する対象領域を、このような理由から、ここにあらためて設定しなければならない。対象領域として、筆者は先学の指摘を参考にして、与那国島からトカラ列島までの領域を、本論の範域として認めておきたい。⁽³⁾すなわち、前述した一般的な《沖繩文化地域》のなかに、《民家》の研究に関しては、トカラ列島を加えるのである。この領域設定には、先学の二つの有力な指摘がある。

たとえば、野村孝文は、ひろく南西諸島の調査から、建築学上、「トカラ列島以南地域では主屋とトーグラを二棟にした別棟型だけであるが、大隅群島は鹿児島県本土及び宮崎県と同様にこの型式以外の民家が

混在している」(1961: 32)ことを認め、「トカラ海峡に住文化圏の転移線を置く」(1961: 94)ことを提唱している。そして、その住文化圏を、主屋とトーグラとの相互関係、主屋平面、トーグラの三点にわたり比較考察しつつ、南西諸島に住文化圏が三つあることを指摘している。すなわち、Ⅰに琉球住文化圏(第1地域 先島群島、第2地域 沖繩島及び附属諸島)、Ⅱに奄美住文化圏(第3地域 与論島及び沖永良部島、第4地域 徳之島、奄美大島及びその附属諸島、トカラ列島)、そしてⅢに南九州文化圏(第5地域 大隅群島、第6地域 鹿児島県本土、宮崎県南部)(1961: 131-132)である。

野村の指摘は、大部分建築学上の特徴を指摘しているもので、生活上の、あるいは宗教観念をふくめた考察に乏しいが、建築学上の特徴をぬきにして、《民家》の問題を語ることはできず、この指摘から、奄美住文化圏のなかに、トカラ列島をふくめる必要性のあることは、あきらかであろう。

第二に筆者が依拠しようとするのは、民俗学上の見解である。ことに民家を生活空間・宗教空間としてとらえた、島袋源一郎の指摘は、沖繩人としての感覚からも民家にかかわる習俗の同一性を認めており、傾聴に価する。「民家の配置は獨り十島村のみでなく、大島諸島より沖繩諸島、先島諸島即ち與那國島に至る迄其の系統を同じうし建物の種類や配置も大同小異であつて、沖繩出身の自分達には左程珍奇な感じもしなかつたが、本土の農家が今日は長屋葺になつて神も人も、家畜も、風呂場も炊事も不浄も皆同じ棟の下に平氣に收まつている状態を見てゐる眼

には、寔に異様に感ずるであらうと思つた」(1937: 149)。島袋の指摘は、建築学上の民家の配置が生活感覚に対応することを示すばかりではなく、民家の空間や平面の分割に、神仏観念と深くかわりあった上下・表裏・男女・左右その他の世界観秩序が対応していることを示し、それが十島村(トカラ列島)から与那国島まで「系統」を同じくして連なっていることを示すものであり、トカラ列島は奄美諸島とともに、民家に関して等しく考察の対象としなければならないのである。

Ⅲ、本論の目的と方法

本論の目的は、《沖繩文化地域》における民家の空間的秩序(民家の配置・間取り・生活上の空間用途と社会的・宗教的シンボルの配置など)が、いかに配列されているかを論述することにある。しかし、筆者が本論で問題としたいのは、民家の空間的秩序が、かくあるという事実を指摘するよりも、むしろいかに描くか、という方法論上の問題である。

したがって、本論の目的にかかわる主要な関心は、第一に、経験的事実 empirical fact をいかに把握し、いかなる理論で、いかに問題を処理するかのプロセスを提示することにある。そのような方法論上の検討を通して、沖繩の世界観の《研究者側》からの理解をもとめることにある。《生活者》にはそれなりの論理があり、それを一般化しうることも筆者は承知しているが、《生活者》の論理の分析は本論の究極的目標ではない。その点における限界もまたおのずから察せられるのである。

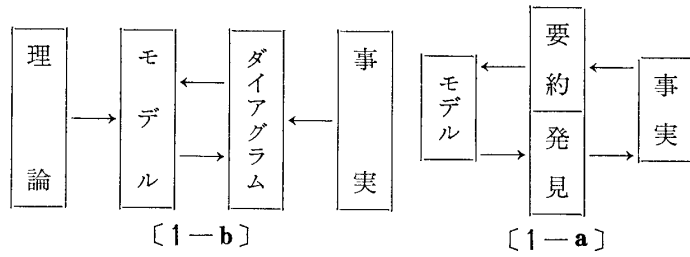
筆者はここで文化人類学のモデル論をもちいる。P. S. Cohen の主張によれば(1966: 70-78)、《モデル》の概念には二つの承認しうる内容があるという。第一に、モデルは《なぞらえ》に利用されてきた。未観察である現象のプロセスを、他所ですでに知られている一連のプロセスから《類推》することによって、仮定するのである。後者は前者にとってモデルとなり、解答が仮定される。第二に、現象の多様性に直面して、われわれがその現象の一般的性格を知ろうとするとき、われわれは、その現象を慎重に簡略化し再構成することによって、現象の多様性にかき乱されることなく、われわれの理解に役立てようとするものである。いわゆる一般化がこれに相当する。すなわち、モデルは現象の《発見》と《要約》とを助ける研究者の道具ということになるが、そのいずれにしても、「モデルを構築することで重要点の全ては、モデルが特定型のどのような多様な例にも適用できる、ということである」(Cohen 1966: 71)。

ここで筆者は、Cohen の唱えた上記の指摘に関し、前者を《類推モデル》、後者を《一般化モデル》と称しておくことにしたい。この両者は、沖繩文化地域における民家の世界観的研究にとってきわめて有効である。事実とモデルとの関係において、事実から要約されたモデルは(一般化モデル)、未発見の事実に対しては類推モデルとして功を奏し、そのような操作の限らない連続のなから、地域全体の普遍妥当なひとつのモデルに行きつくであろうからである(第1図-a)。

しかし、事実とひとくちにいっても、事例の無限なる状態にたちいた

るとき、事実自体のとりあげかたにも方法論上の問題が生じる。事実の何をもって事実の代表としようか、事実自体にも、特定型と称しよう型がある。

H. G. Nutini の主張によれば (1968: 1-21)、現象の把握には、モデルとダイアグラムとの区別が必要であるという。ダイアグラムは、経験的資料の内容の秩序づけられた排列に関連し、依然として資料の一部であるが、モデルは資料ではなく、資料を基礎にしてできあがったものである。また、ダイアグラムは、経験的・本体論的・実態資料の性格を



—第1図— モデルの意味

論・仮定・憶説を排除することはできず、同じ現象内容を異なったモデル

帯びたものであるのに対して、モデルは超経験的・認識論的・理論的の性格を帯びたものである。要するに、ダイアグラムは経験的事実を反映したものであるのに対して、モデルは理論的目的を反映したものである、ということになり、第1図-bに示すように、ダイアグラムとモデルとが、事実と理論との媒体となるわけである。ダイアグラムは、それ自体、一つの事実としてとりあげられ、われわれに示されるが、その事実、他の多くの事実の表徴として約束されたデータでなければならぬ。モデルは、データそれ自身との内容とは無関係であるが、理論にふくまれる推

ルが説明することがありうる。しかし、異なるモデルのいずれにしても、Cohen のような、特定型のどのような多様な例にも適用できる性格を排除するものではない。したがって、モデルは、理論的目的のために、捨象されたり、修正されうる要素をたえずもっている。

本論は、このような方法論上の操作を行なうことによって、民家を舞台として織りなされた世界観の原図を析出してみようとすむわけである。

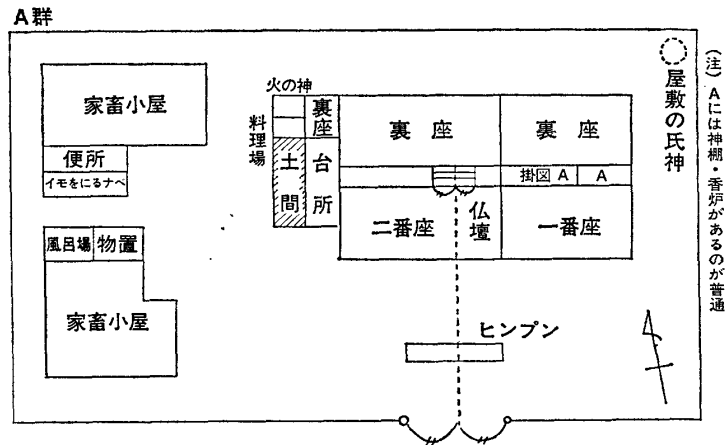
IV、民家の平面構成

民家および民家の排列された屋敷が、沖縄の世界観表象の場であるとして考察してきた諸例を、われわれはすでによく知るところである (Mabuchi 1968: 121-127, 渡辺欣雄 1971a: 102-104, 村武精一 1971: 133-137, その他)。なかでも、従来の研究では、民家の配置(位置関係)および民家内部の間取り(平面分割)およびその用途・宗教的表象物が、沖縄の世界観を説明するうえで有力な手がかりとなってきた。その際、比較や考察の規準として最も重要視されてきたのは△方位▽であった。しかしその方位にもいろいろな思考の枠組があって、われわれが用いる三六〇度の度数をもとにした△自然方位▽、十二支の方位配置による、民俗的意味を伴った△十二支民俗方位▽、屋敷の四隅・門口などを規準とした△屋敷民俗方位▽、東(アガリ)西(イリ)南(ハイ)北(ニシ)など、それぞれの地方で呼び慣わされた多義的意味成分の内包された△民俗概念方位▽など、いくつかの△方位▽規準が

考えられる。しかし、沖縄文化地域全体を比較考究するうえで、どの方位規準が有効であるかといえば、残念ながら「自然方位」以外に有効なものはない。民俗方位を規準として、比較するだけの資料そのものがまだ整っていないのである。これは本論に限界を与えているところであり、将来の早急、かつ多地域にわたる研究が必要とされる課題であろう。本論では、このような消極的理由から「自然方位」を比較の規準とするが、モデル論からすれば、方位がどこまでモデル構築に有効なものであるか、ということも、検証を必要とするし、方位がモデル構築に非有効的であるとすれば、それではモデルにとってどのような論理的な規準が理論的目的にかなったものであるのか、ということもたえず問題とされるであろう。

沖縄文化地域における民家の配置・間取りのなかで、最もよく報告されるものに、筆者がA群と名づけた型の民家の平面構成がある。すなわち、A-1図のように、門口には「ヒンブン」などとよばれる障り物があり、家に入ろうとする者は直進できず、東か西のいずれか一方へ向かって、母屋へと接近せねばならない。母屋は、田字型四室の居住部分と、土間ないしは台所のような付帯施設を居住部分の西に接合させている。このように田字型居住部分と西方の付帯部分とを伴うのは、この地域に一般的な寄棟造りの特色であるといえよう (cf. 石原憲治 1958: 334, 蔵田周忠 1958: 68)。中には、台所・土間の部分もない、単に田字型ないしは横列縦割二室の居住部分だけの母屋もある。

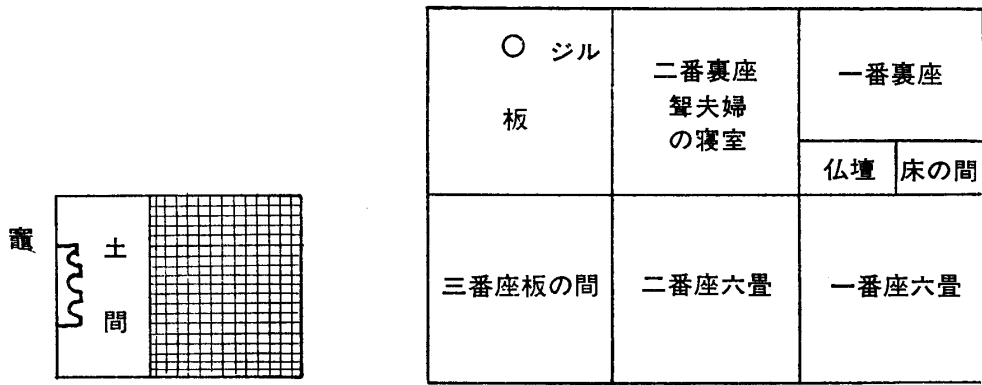
ここで理解しておきたいのは、母屋の基本型は、中柱を中心に田字型



【A-1図】 沖縄本島糸満町真栄平部落の民家配置図並びに間取り
(明治大学社会学関係ゼミナル編 1971: 321)

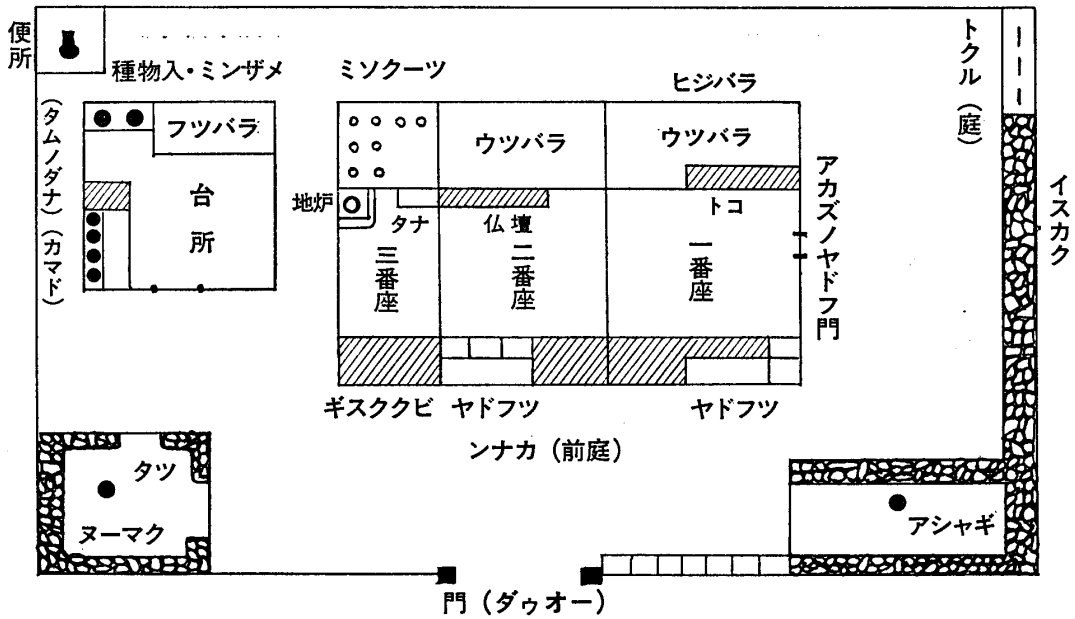
に四室を配する居住部分であるが、西方に付帯施設を接合する母屋が一般的であるというのである。A-1図も、A-3図も、A-4図もその例であり、A-5図は奄美に特徴的な三棟民家ではあるが、やはり西方へと付属家屋を置いておくことである。A-1、3図に関し、東部分の田字型居住部分を除き、西部部分が、土間・台所となるか、居住部分(三番座ほか)となるかは、それぞれの地域や家に応じた変化である、ということである。

この地域は、分棟型とも別棟型とも二棟型ともいわれる民家のように、カマヤあるいはトイグラを別棟として建てるのがよく行なわれており、A-3図がそれを示している。それをモデルとして要約すれば、A-4図のごとくになるであろう。その際、図中のk部分は、同棟・別棟を問わないのである。A-5図は、A-4図に要約されにくいように



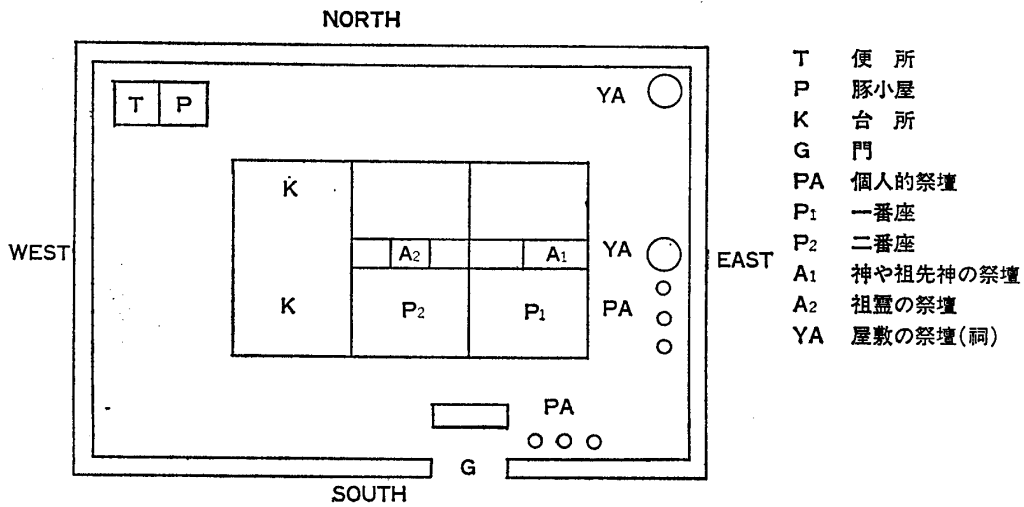
〔A-2図〕 八重山諸島・黒島東筋の民家の間取り

(琉球政府文化財保護委員会編 1970:312)



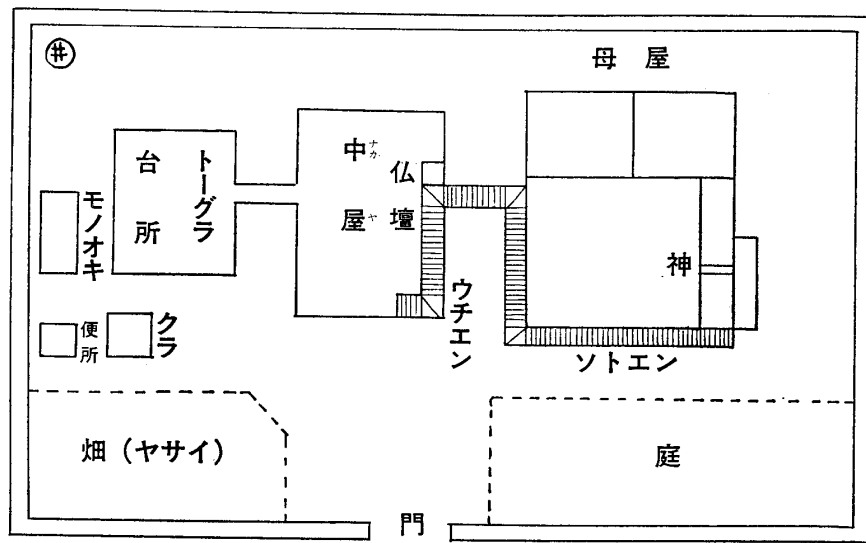
〔A-3図〕 宮古島島尻村の一般民家の配置図及び間取り(平良市字島尻)

(琉球政府文化財保護委員会編 1970:190)



〔A-4図〕 琉球の家屋の構成(範例的モデル)

(馬淵東一 1968:122)



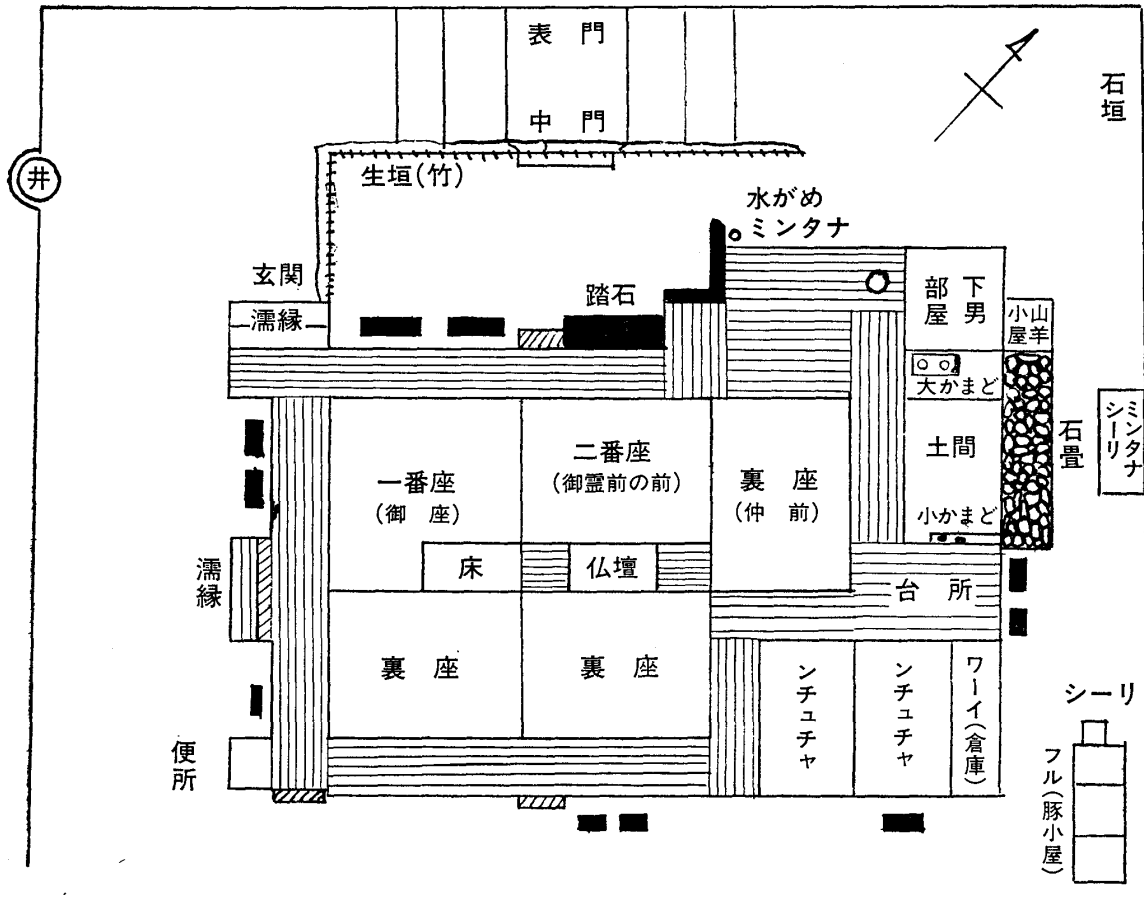
〔A-5図〕 奄美大島・管鈍部落の民家配置図並びに間取り
(島袋源一郎 1937:150)

思われるし、少なくとも建築学上はA-4図的モデル・ハウスとは異なるが、「中家」は世界観上、A-4図のP₂に相当する事実から、やはり、A-4図とは大きく抵触しないといえる。

A群は、A-4図のモデルに一般化されうる。しかし、A-4図はA群のモデルではありえても、B群・C群・D群のモデルとはなりえない。したがって、A-4図は、A群のダイアグラムとしてB群・C群・D群をふくめたモデルから説明されなければならない。

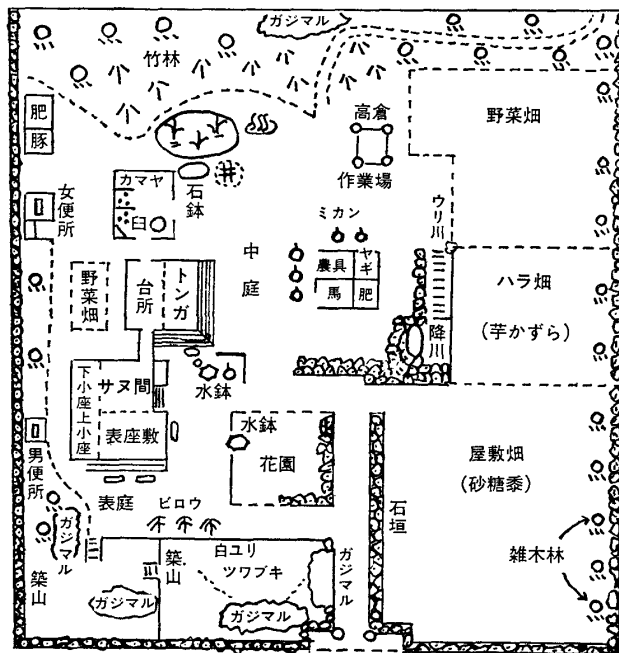
B-1図は、A群と比べてみるとほぼ逆である。門口から入る人間にとっては、B群はA群とまったく同じ環境をみるであろうが、自然方位において、またおそらく民俗方位においても、その方位がだいたい一八〇度逆なのである。すなわち母屋内部は、表座が北(北西)、裏座が南(南東)、一番座が西、土間・台所などが東なのである。しかも門口もまた北(北西)にある。そうなると、A群を規準とした、諸々の用途・意味(後述)などは、そのいくつかはA群とは△逆▽となるはずである。ただしその内容がいかように△逆▽であるかは、いまだ全地域的資料が整っていないため、指摘はできない。

C-1図は、C群を構成するものである。A群と比べて「おそらく」方位は同じであるが、間取りが異なるもので「あろう」。本図は自然方位の指示がなく、予想によるものである。門口が南であることにかわりはないが、上座(下座(一番座(二番座)))の序列がA群とは逆で、台所・土間・豚小屋その他まで、A群とは逆になっている。いわゆる△逆構え▽とか△左構え▽とかいわれる形態である。

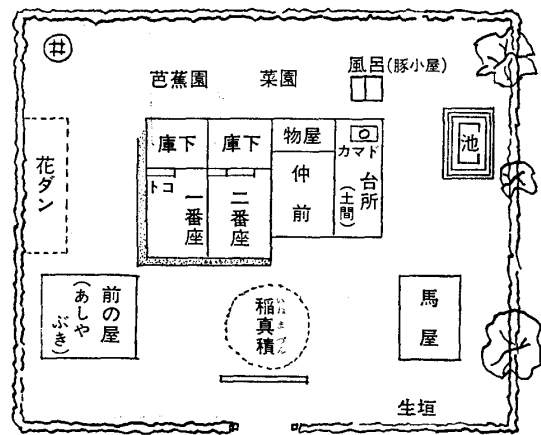


〔B-1 図〕 沖縄本島那覇市首里の民家配置図並びに間取り
 (琉球政府文化財保護委員会編 1970:134)

沖縄文化地域における民家の塑形的モデル 一四五



〔D-1 図〕 奄美諸島・喜界島旧士族の民家の配置図および間取り
 (竹内 謙 1969:36)

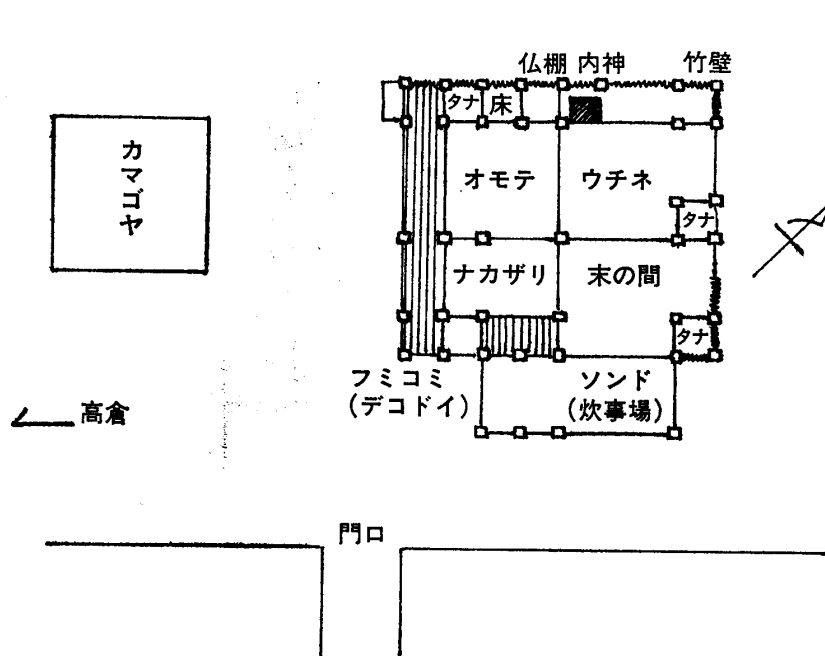


〔C-1 図〕 農村家屋の一例 (比嘉春潮 1959:108)

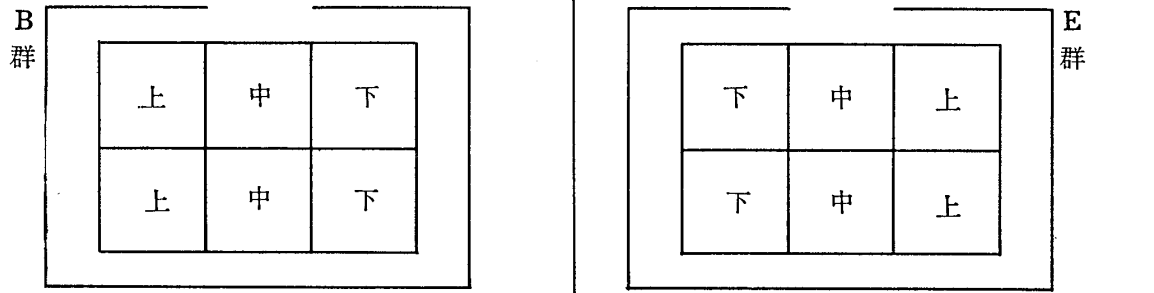
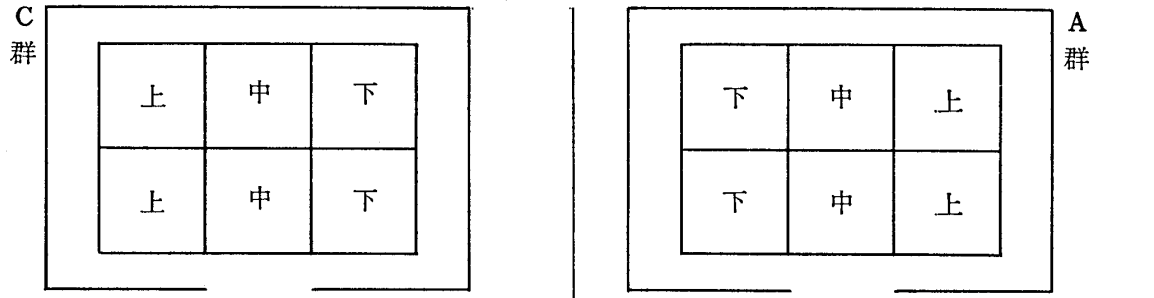
と、このようにしてゆくと、第2図のように、門口が北側にあるが、間取り及び民家配置はA群と同等のもの（E群）もありうるはずとなる（類推モデル）が、まだ事例を手にしていない⁽⁶⁾。

つぎにD群であるが、D群を含む縦列横割型の各群（F・G・H群）は、ことに奄美諸島とトカラ列島によくみられるものである。奄美諸島のいくつかの村々では、門口がカギ型になっており、沖縄本島以南地域とはちがって、ヒンブンを配して二方向に入り口をつけるものがすべてとはいえない。最近では、ヒンブんに相当する遮蔽物すらない民家が多い。D-1図はなかでも最も配置のよく整った民家であろう。D-1図では、居住部分・調理部分・煮炊き部分がすべて別棟であり、居住部分と調理部分とが渡り廊下で繋がれている特色をもつ。その排列は「おそらく」南⇄上⇄北⇄下へという順列となっている（「なのであろう」）。D-1図を代表するD群は、さきのA群と比べると九〇度配置がちがうものと解釈できる。第2図ではダイアグラムとして、カギ型門口をそのまま記したが、門口のかたちは、A・B・C・E群と同様、母屋と平行したかたちのものでもよい。事実、配置はD群であっても、門口は母屋と平行した形態の民家を筆者は奄美大島で実見している。

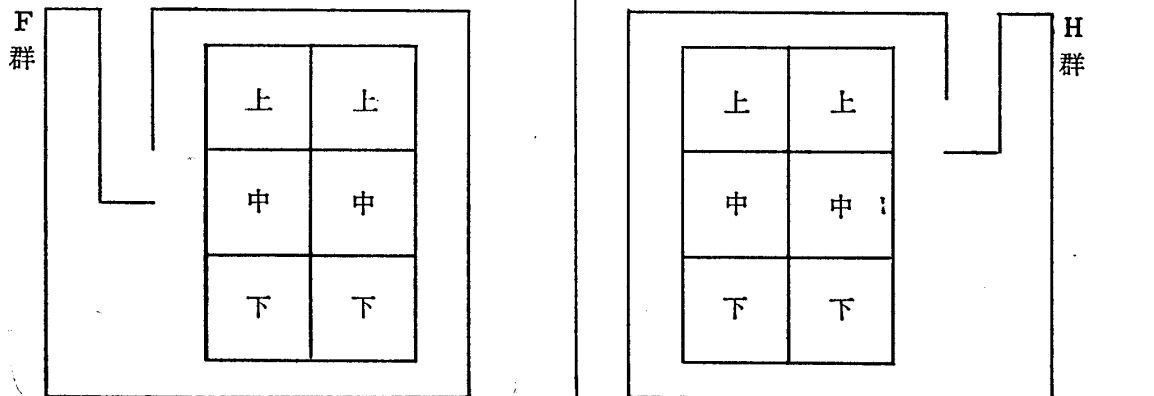
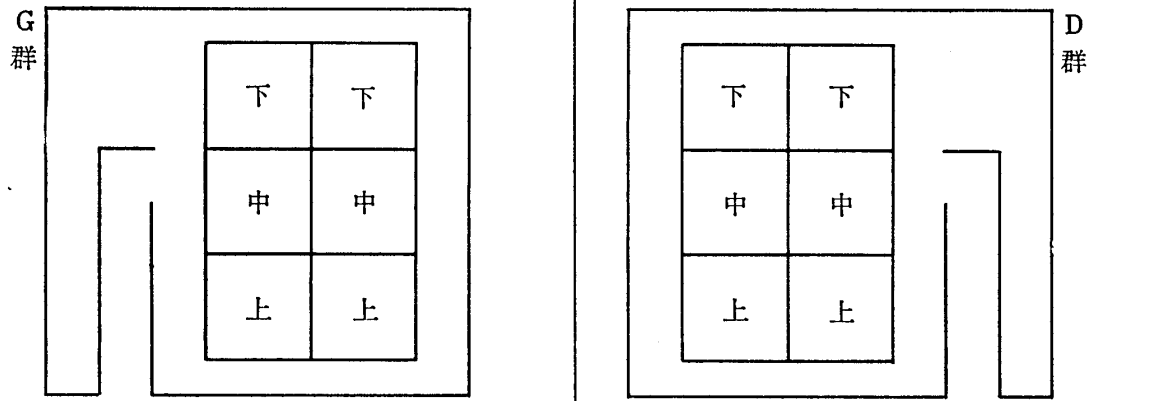
その他、縦列横割型でそれぞれ横列縦割型民家・間取り配置とは九〇度のズレをもつ各種の民家がありうることになる。さきに縦列横割型民家は、奄美・トカラによくみられると述べたが、もちろん、これらの地域でも、A-5図のような民家が、その数においては多数である、という統計的資料を全数調査によって、筆者は得ているが、公刊に至っていない。



〔F-1図〕 トカラ列島・平島の民家配置と間取り
(下野敏見 1966: 220~222)



横列縦割型変換群



縦列横割型変換群

沖縄文化地域における民家の塑形的モデル 一四七

—第2図— 方位規準による平面分割の変換群

ない。

事例の枚挙による繁雑さを斥けて、ここで第2図により、これまでの論点の要約をしてみることにする。ここでは、各ダイアグラムをサ字型平面分割に要約し⁽⁷⁾、方位による変換群を構成してみることにする。

X軸は南北、Y軸は東西を示す。上中下の配列は、一番座とか表座敷などと称する、いわゆる民家の上手に相当する部分からの序列である。

上中下は、単に三分割をあらわすものではなく、(上上)↓(上)↓(中中)↓(中)↓(下)↓(下下) というような《連続》continuumを理念

とするものである。横列型・縦列型の双方で上・中・下のそれぞれを二分する線は、家屋横造上、棟木の走る方向であり、各地域により表・裏座・小座などの表現であらわされている。これは、建築学上、棟木の下に部屋をつくる、あるいは棟木を支えるサスを強固に、しかも長くして、表座を二重にするなどの構造にしないかぎり、二対の部屋を構成するにすぎない。したがって、先の《連続》とはちがひ、世界観のうえで《二項対立》binary oppositionの表出が原則とされる。サ字型平面分割を変換群に用いたのは、このような《構造》上の理由によっている。そして、民家の平面構成より、世界観を認めようとする場合、その《構造》的必然性により、《連続》としての意味の対置と、《二項対立》としての意味の対立とを、われわれは区別しておかなくてはならない。

さて、このようにして得られた変換群から、自然方位を規準として、民家の平面構成を類推すると、民家の平面構成の統計的頻度は得られる

(たとえばA群が最も多く、E群その他はかなり少ない)が、横列縦割型から縦列横割型までの、存在可能と思われる民家の平面構成のすべてを、モデルのなかに投影することはできなくなる。民俗方位による規準によって、その普遍性がえられるならばそれに越したことはないが、たとえば、南東・北東・北西・南西にそれぞれ四五度に向いている民家の平面構成を、第2図によって説明することはできないのである。結論として、自然方位による民家の平面構成の普遍的モデルはつくりえない、ということになる。

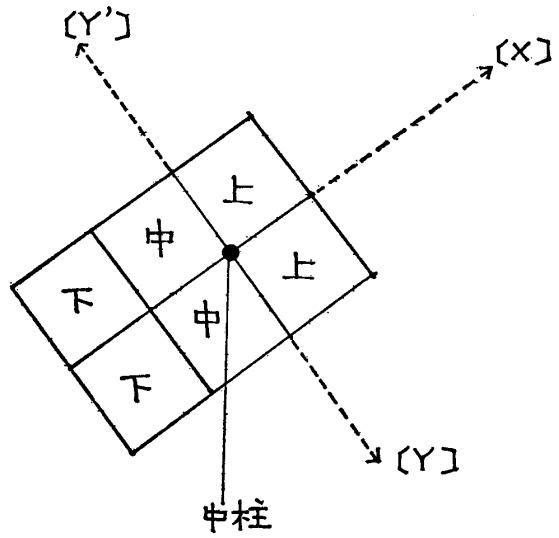
それでは一体、民家の平面構成を世界観的に序列づけるポイントは何か、ということになるが、それは、門口の位置と上座の位置にあるということは、変換群から容易に読みとることができであろう。

V、民家の塑形的モデル

民家の平面構成は、民家の建築以前から、建築予定地に織りなされた、象徴的意味の網の目によってすでに予定されているものである。このように、民家の平面構成の条件というものは、すでに村落レベルにおいて、あるいは村落を越えた宇宙世界の秩序cosmosにおいて許容された幅を保ちつつ、決定づけられているのである(渡辺 1971b: 10-30, など)。

民家の平面構成にかかわる決定づけの規準には二つある、と考えられる。一つの規準は門口により、他の一つは上座による。

沖縄文化地域にあって顕著なのは、「村落が仮令島の北海岸にあって

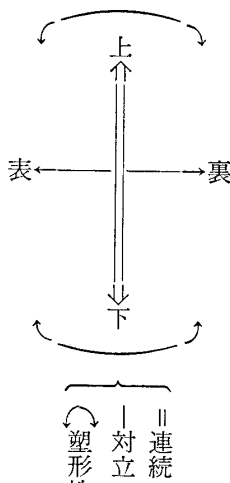


—第3図— 民家の塑形的モデル

も、民家は殆ど南面してゐる」(宮良 1971: 111) ことである。ここでは、民家の殆ど南面を、かなりの統計数で南面する、と読みかえられうるであろう。ただし、自然方位における真南に門口を定めることは、地域による差はあるだろうが、筆者はあまり聞いたことがない。南は福・徳・善の来訪方向であるとともに、災・凶・魔の来訪方向でもあり、また両者の退去方向でもあるという進退の方位と説明されることが多いだけに、善を迎えるために南面するが、悪を防ぐために(直進をさけるために)、真南には向けず、ヒンブンなどの遮蔽物・シーサーなどの守護獅子、石敢当などの魔除けを置くのである。

このように、南はさまざまな意味があり、世界観上の価値がある。しかし門口の位置だけでは、民家の平面構成は定まらない。第3図でいう

「[Y]あるいは[Y]が門口を意味づける方向であって、[X]が定まらぬかぎり、民家は位置が定まらない。門口の決定は民俗概念上よく説明をきく問題であるが、論理上、上座の位置が、じつは先行しているのである。[X]の方向を決定づけるものは、聖地・方位・祭場・位階秩序その他民間の世界観で知られる聖なる方向である。聖なる方向の説明やその脈絡は、各地各様であり、これといって一般化できる意味をのべるにはまだ事例の十分な準備ができないが、統計上最も多いのは「東」である。聖なる方向をもって「[X]」が定まれば、それによって上↓下の排列(上下という対立もあるであろうし、上中下という連続もありうる)が定まり、あとは前述した門口の位置が「[Y]」か「[Y]」、奄美のある例では、出入口の位置が「[Y]」か「[Y]」に定められる。ダイアグラムとの対応のなかで、中柱を回転軸として「[X]」をあらゆる次元にあわせれば、各ダイアグラムの相対を知ることができる。その際、「[X]」は民家の平面構成の上下の連続的価値を定め、「[Y]」および「[Y]」は、表裏の対立的価値を定めるといえる(渡辺 1973a: 160)。



—第4図— 価値づけ規準

VI、民家の象徴的用途

沖縄の民家配置と、それに付帯する習俗について調べた島袋源一郎は、『室房の区画及び用途』についてこのように述べている。家屋内の部屋は、「客の種類によつて応接の場所に多少の相違がある。例へば、客が貴人若しくは士族の男子ならば一番座にて、又士族の女子や平民の男子ならば二番座にて、又平民の女子ならば三番座にて応接するが如きである。家人の日常居る室も家によつて大体決つてゐるやうである。今仮りに父母に五子ある家なりとすれば、父は二番座、母は三番座、長男は一番裏座、次男は二番裏座、三男は三番裏座に居り、而して四男・五男は未だ幼少にて、自己の室を必要とせざる為め、母と共に三番座に居り、或は四男・五男は共に一番座に居ることがあり、その中に次男・三男が結婚して分家をすれば、その代はり二番裏座、三番裏座に移ることがある」(1937: 117)。以下、同文で島袋が指摘したことを図示すれば、第5図のようになる。

島袋の指摘は、ひとつの典型にすぎないが、範例を示すことにより明確な序列を暗示している。島袋の指摘のなかで、表座・裏座は世代別に対立している。すなわち、表座 \parallel 親・幼少の子供・裏座 \parallel 年頃の子供である。ただし表座にいる幼少の子供は、居が定まらず明確な価値づけが与えられてはいないので、表 \parallel 親、裏 \parallel 子の対立として考えられうる。

一番座 \sim 三番座の序列では、上 \parallel 男 \downarrow 下 \parallel 女、上 \parallel 士族 \downarrow 下 \parallel 平民の対立コムプレックスを示している。部屋に照準をあわせれば、各デュアリティは相互にズレながら上 \sim 下に排列されており、表裏の対立とは質

の異なる連続を示す。さて、このような部屋の用途は、島袋も述べるように、日常生活・婚姻儀礼・葬送儀礼などによって異なっており、まずは得られた資料のうちからいくつかを紹介して、範例的モデルを構築してみることにはしたい。

台所 士族食事 (母・子供) 平民食事 (親子一同)	三番裏座 三男 出産場 年頃の男女	二番裏座 次男 出産場 年頃の男女	一番裏座 長男・花嫁 年頃の男女
	三番座 母・四男・五男 士族食事(祖父母・父) 平民女子客	二番座 父 士族食事(祖父母・父) 平民男子・士族女子客 死者	一番座 四男・五男 貴人・士族男子客

—第5図— 部屋の用途 (島袋による)

a、日常生活における部屋の象徴的用途

喜界島：表座敷は上客の座であり、結婚式の新郎新婦、盆祭りの祖霊、葬式の棺、などの座である。家庭内の儀式は、すべてこの座敷で行なわれる。サヌマ「表下座」は主人夫妻の居間であり、寝間である。上小座「裏上座」は、どこの家でも子供の勉強部屋か、息子の寝間であった。下小座「裏下座」はサヌマから出入りする。物置「裏下座の付帯部屋」は通常納戸ナドと呼ばれ、衣裳びつなどが置いてある。娘の寝間にする家もあり、物置きにしている家もある。トンガ「台所兼茶の間」は、家族の居間で、食事をしたり、休憩したりする。この部屋に人びとは群がってお茶を飲んだり、世間話をしたりする（竹内譲 1969：40—41）。

糸満町兼城：東の方を上座とするが、拜所の近くでは上座を拜所の方にする。一番座（ウフジャー）には床の間を設けるが、総本家ではアジ「神棚をいい、一族が祀る」を設けているところもある。二番座（ナカメー）には仏壇（リージン）があり、台所と土間とをあわせて三番座（スム、トングッ）といっており、日常家族そろって食卓を囲むところである。クチャ「裏座」は物置きにしたり、勉強部屋にしたりしているが、お産の時には産婦が寝起きするところでもある（桃原茂夫編 1969：79）。

勝連村南風原：クザシチ「表上座」は接客用、ユカネー「表下座」・シム「居間」は食事をすると、クチャ「裏座」は夫婦の寝室である。家によっては、正面右側にアガリアサギ（祭場）があり、客間にしたり、ユニス（穀物）をいれたりしているところもある（奥村幸己編

1970：86）。

与那城村宮城：イージャー「表上座」は寝室・勉強部屋に使い、日常の客は下座「表下座」に通すが、あらたまった客の場合には上座「表上座」に通す。家族数の多いときには、メンアサギ「前庭の小屋」をりっぱにつくって寝室にした。ふつうは上座「表上座」、中座「表中座」に寝るが、クチャ「裏座」は若夫婦が寝たり、反対に、朝遅くまで寝ることができるといので年寄りが使用したりする。ウフントウ「台所」は、むかしから土間であったもので、女はここで食事をとった（狩俣敏夫編 1969：18—19）。

国頭村与那：ウフグイ「表上座」では、客を接待したり、泊める部屋として使用されているナハザ「表中座」がある。サンバンザ「表下座」は祖父・祖母の部屋となっている。サンバンザは、老人のいない家では物置きなどに使用している。ニザシチャー「裏上座」は家族の寝室になっている。ズイヌハタ「裏下座」は、家族団らんの場となり、炉を囲んで食事をする（狩俣敏夫編 1969：74）。

上本部村具志堅：表上座は戸主夫婦の寝室に利用したり、ニービチ（結婚式）の集まりに男たちが席をしめる場所である。また来客の接待、とくに珍客や上客を案内する場合にも使われた。表中座はニービチのときに女たちが席をしめる場所であり、寝室にも、祝祭日の食事の場所にも利用される。裏下座はジール（地炉）があつて冬の暖をとったり、湯を沸かしたり、食事の仕度をする場所である。出産のときには、多くの家がこの部屋を利用する。そのときには男子禁制の場所となる。裏上座

は、物置きにしたり、ケー（衣装箱）を置いたり、穀物の種子を保存したり、老人の隠居部屋、家族の寝室などの用途があり、さらに妊婦のこもる部屋ともなる。茶の間は、家族がそろって日常の食事をするところであり、台所のそばの物置は、調味料や穀物や種子の保存の場である（桃原茂夫編 1968: 82）。

城辺町砂川・アガヌヌザー「表上座」は、寝室やあらたまった客を通すところである。アスビザー「表中座」は、普通の客を通したり、子供たちが遊ぶところ、ムヌファウザー「表下座」は食事をするところである。花嫁は、二番座「表中座」からはいり裏座に進む。新夫婦は裏座に寝る（奥村幸巳編 1970: 24）。

以上のように、日常生活における部屋の用途は多種多様な報告がなされている。なかでも日常生活の部屋の使い方は、家の人口構成や、家族周期、付帯施設の有無、職業、資格による諸条件に左右されやすく、情緒・禁忌などの生活感覚にも左右されやすいが、概して表上座は「客」
 「儀礼」
 「神霊拝所」にかかわり、めったに使用しない場所である。であるから、子供でも幼少のころの寝室や勉強部屋など「合理的」
 「経済的」な部屋の使用も許されている。これに反して、表下座は、家族の食事の場所、日常の客の接待所、寝室、あるいは土間・台所となっており、きわめて「日常的」
 「家族的」な場所である。

裏座は、「物置」
 「お産」
 「新夫婦の寝室」
 「食事」
 「衣裳・種子の保存」の場となっており、「客」その他との外交の場ではなく、いろいろなものの準備やそなえに関係している。また、表座ほど固有の意味が

与えられず、裏座として一括説明されることも多い流動的な、意味のほぼ同じ場所でもある。

それでは、儀礼の場面で部屋はどう使用されているであろうか。

b、婚姻儀礼における部屋の象徴的用途

加計呂麻島木慈：婚禮は婿方の家の表上座で行なわれる。嫁方は入口側、婿方はその反対側に坐る。婿嫁は床を背にして坐り、嫁は嫁方、婿は婿方に近い席をしめる。嫁方は嫁を上手として、嫁に近い席から男女の別なく年長順にすわる。婿方は、チスブリ（司会者）をたて、傍系親族その他がやはり年長順に坐す。式がすむと嫁は納戸「裏上座」に下がって着替え、宴の手伝いをする。そのあと表上座では婿嫁の男側の祝いがある（鹿児島民俗学会編 1970: 102—104）。

勝連村南風原：夕刻、婿の家から嫁を迎えに出、嫁家に至る。嫁家に入る際二番座「表中座」から家に入り、表中座で盃を交わし、つぎには婿家に赴き、婿と嫁は二番座の仏壇の前に坐って、盛飯を互いに食う。

儀式がすむと嫁は着物を着替え、家の手伝いをする。婿は一番座「表上座」で親族・友人と酒宴を楽しむ（奥村幸巳編 1970: 92—93）。

与那城村宮城：嫁方の家では、表中座で交盃、婿方の家では表中座で盛飯の儀がある（狩俣編 1969: 30—31）。

国頭村与那：嫁方では表上座で交盃、婿方では、婿嫁が表中座で交盃（狩俣編 1969: 82—83）。

久米島比屋定：嫁方では、表中座で交盃、婿方では表中座で交盃。交盃後、婿嫁は裏座で盛飯を儀食する。青年たちとそこで懇談する（嶺井

敏子編 1967: 32—33)。

読谷村座喜味: 嫁方では表中座で交盃し、仏前に拝礼する。婿方では表上座より入り、表中座で交盃↓盛飯儀食。その後、嫁は着替えて台所の手伝いをし、男たちは表上座で宴を催している(伊礼百合子編 1966a: 60)。

城辺町砂川: 嫁方では表上座で交盃、仏前拝礼、婿方では、嫁は表中座より入り、表中座で交盃後、嫁は宴会の手伝いをし、婿は酒席につく(奥村幸^イ編 1970: 34)。

婚礼で最も多く使われるのは表中座である。上記のように、とくに婿方における儀式に顕著である。しかし、嫁方では表上座が多く用いられ、また披露宴は、表上座で多く行なわれる。嫁が着替えをする場所について書いてあったものは一例であったが、裏座であることはかなりひろいであろう。婚礼における部屋の用途は、フレキシブルではあるが、表上座↪表中座に集中していることは、a項の叙述にもあった部屋の用途に合致している。

c、葬送儀礼における部屋の象徴的用途

加計呂麻島: 死者の安置は納戸(ネーショ)〔裏上座か裏中座〕に、西か北あるいは南向きにして寝かせる(鹿児島民俗学会編 1970: 111)。
喜界島: 死者の安置は表上座であるが敵みつに蚊帳で客室と安置所とを区切る。出棺は、表屋戸口〔上門〕を使用する(竹内謙 1969: 129—130)。

糸満町兼城: 死装束を施したのち、表中座に西枕にして安置する。一

連の儀式はすべて表中座を使用する(桃原編 1969: 84—85)。

勝連村南風原: 死者は表中座に安置する。一連の儀式は表中座で行なう。ヒンプンのある家では「東廻り」に出棺する(奥村編 1970: 95)。
与那城村宮城: 「沐浴」(湯灌)のときは裏座で、その後死者は表中座に安置。一連の葬儀は表中座で行なう(狩俣編 1969: 85—86)。

国頭村与那: 湯灌は裏座で行ない、その後死者は西枕にして表中座に安置。葬儀は表中座で行なう(狩俣編 1970: 32—34)。

粟国村西^イ: 死者は表中座に安置。葬儀は表中座(桃原編 1968: 34—35)。

仲里村比屋定: 死者は表中座に安置。葬儀は表中座で行なう(嶺井編 1967: 36—37)。

読谷村座喜味: 死者は表中座に安置。西枕。葬儀は表中座。魔物追いの儀式は表中座で行なう(伊礼編 1966b: 62—64)。

城辺町砂川: 死者は表中座に安置。南枕だが読経時は東枕。一連の葬儀は表中座(奥村幸^イ編 1970: 37—38)。

竹富町祖納: 湯灌は裏座。安置は表中座、南向きの家では西枕、東向きの家では北枕。葬儀は表中座(桃原編 1969: 33)。

葬送儀礼における部屋の用途は固定している。湯灌の場所は裏座、死体安置の場所は表中座、葬儀も表中座である。そして枕の向きは北↪西↪南で、出棺時の死者の輸送は下↪上のプロセスを経る。多少の例外はあるが、おしなべてこのようである。

以上のように、一連の部屋の用途が考えられるが、いまこのような部

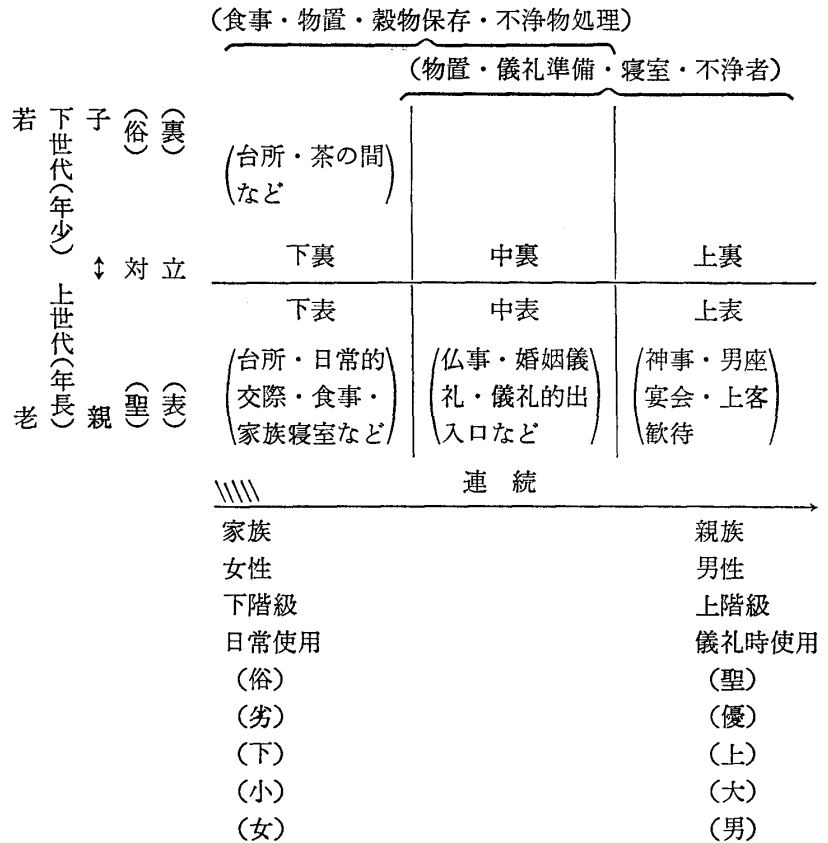
裏下座 (含カマヤ) ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱	裏中座 (含台所) ③ ⑥ ⑧ ⑲ ⑬ ⑯ ⑰ ⑳ ㉑	裏上座 ③ ⑧ ⑳ ㉑ ⑥ ⑰ ㉒ ⑤ ㉓ ⑦
表下座 ⑦ ⑪ ⑬ ⑳	表中座 ① ⑤ ⑩ ㉓ ㉔ ㉕ ⑪ ⑮ ⑲ ㉖ ㉗ ㉘	表上座 (含アサギ) ① ④ ⑤ ㉓ ㉔ ⑨ ⑫ ⑳ ㉔ ㉓ ㉕

- | | | | | |
|---|--|---|---|--|
| <p><寝室></p> <ul style="list-style-type: none"> ① 戸主夫婦 ② 息子 ③ 娘 ④ 上客 ⑤ 一般寝室 ⑥ 老人 ⑦ 祖父祖母 | <ul style="list-style-type: none"> ⑧ 新夫婦 <客接待> ⑨ 上客 ⑩ 中客 ⑪ 日常客 ⑫ 客一般 <食事> ⑬ 家族 | <ul style="list-style-type: none"> ⑭ 女 ⑮ 祝祭日 <出産> ⑯ 出産時 ⑰ 妊婦 <その他> ⑱ 普段の交際 ⑲ 子供の遊び場 | <ul style="list-style-type: none"> ⑳ 勉強部屋 ㉑ 家財道具置場 ㉒ 穀類保存 〔結婚式〕 ㉓ 交盃 ㉔ 宴会 ㉕ 嫁の着替え ㉖ 入家式 | <ul style="list-style-type: none"> ㉗ 盛飯儀食 〔葬式〕 ㉘ 湯灌 ㉙ 安置 ㉚ 葬儀 〔その他〕 ㉓ 神祈願 |
|---|--|---|---|--|

—第6図— 用途の要約

屋の用途を要約してみると、第6図のようになり、モデル化してみると、第7図のようになりうる。

もとより第6図は沖縄文化地域内の個性的な事例を要約したもので、モデルとして、あまねく沖縄文化地域に通用しうるか否かの保証はない。そこで世界観秩序にみあう論理上の排列に転化させ、精錬してみたのが第7図である。すでに村落やそれ以上の宇宙世界に深い関連をもった家屋の平面分割は、当然のことながら外在する宇宙に深い意味関連を



—第7図— 部屋の用途の範例的モデル

呈している。家族・女性・下階級・日常使用と若・下世代・子のカテゴリが相乗する△下裏▽の区画は、もっとも世俗的で、ときには不浄な意味の付帯するところである。逆に、その対角線上にある△上表▽の区画は、親族・男性・上階級・儀礼的使用と老・上世代・親のカテゴリが相乗効果をあらわし、外界へとその意味空間を拡大する。また、△中裏▽△上裏▽は、△下裏▽と同質的な意味が与えられている一方で、

△中表▽△上表▽の補完部分をなし、ことに儀礼的場面での準備部分となっている。△中表▽は、△上表▽のつぎの部分、すなわち延長部分であって、△上表▽に対する△下座▽となっているが、ことに△中表▽に仏壇を設置するところでは、儀礼の中心的場面、ことに祖霊・祖先との交渉場面となって、神霊との交渉の場面である△上表▽と対峙している。△下表▽は、その用途の流動性から知られるように、実際の場として△表▽一般の部分構成する一方、台所・食事の場(茶の間)のように、日常生活に不可欠な△下裏▽と同質の意味を帯びるところである。つまりは、△下▽一般が、調理・煮炊きの部分として、居住部分である△上▽△中▽の部分空間と分離しうる所以である(別棟型)。

ひとはこのような座標と意味の場に存在することによって、位置づけられもし、また人生の階梯を歩むことにもなる。民家の平面分割がもしも社会のあらゆる意味を凝縮した小宇宙の表現であるとすれば、沖縄にかぎらず世界的にさらに比較考究の視野を拡大せねばならないであろう。そして、いまある文化人類学の家屋の世界観研究(とりあげることでできなかったが、Needham 1962: 88, Tambiah 1970: 19, Cun-

ningham 1972: 116~, Gossen 1972: 135~, ほか)のきわめて閉鎖的なダイアグラムも、再検討し、沖縄研究からの批判も行なってゆく必要があるであろう。筆者はこれをひろく△天文人類学▽的研究として行なうことを、将来の課題としているのである。

VII、附説・結語にかえて

本論はもとより、沖縄の世界観の一具象として、民家にあらわされた秩序をいかにモデル化しうるかを考えたものである。筆者がこの問題に関心をよせたのは、鳥越憲三郎(1965: 88-95)の名著を読んでのちのことであった。鳥越によれば、上座がいかにして決定づけられるかは、御嶽^{ウツキ}および御嶽に通ずる神の道がどこにあるのかによる、との見解を示していた。一九六九年夏、沖縄本島北部に赴いた筆者は、自分の調査村落数村でそれを確かめてみたのであるが、上座の決定は御嶽よりもむしろ△東▽という多義的な色彩をおびた方位観に依拠することが多いのを発見した。その他旧村の位置・古墓・祭場・聖祠もいろいろと関係しており、世界観を描くことへの興味やむずかしさを思い知らされた。

但し、民家の設定についてはきわめて合理的・経済的その他の事情がかかわり、土質・日射・風向・地形・水・植生・河川などの自然条件や道路・諸施設・社会関係・職業などの社会的条件、快適性・安価・便宜性などのその他の条件もあり、あまねくすべてにわたって沖縄の民家が世界観を表象するともいえない。一九七二年に調査した奄美大島は、とくに世界観の抽出にとまどった。以前にはあきらかに保持していたであ

ろう固有の世界観の多くを失なっていたからでもあり、また筆者がいま指摘した世界観以外の諸条件を重視し、われわれに説明したからでもある。といって奄美には、家屋に世界観の表現がないのではない。意味こそ「意識」のうちになくとも、代々にわたって住み慣れた家に、祖先は「無意識」の意味を伝えており、床の間・仏壇の置きかたや神祠をおく場所など、われわれが認める奄美の世界観の所在は、いたるところにうかがわれるのである。

また、一九七五年夏から現在まで調査中の与那国島も、おおよそ沖縄本島とその観念は似ているものの、細部にちがいと、世界観の説明やら解釈がまちまちで、いろいろな「意識的モデル」がえられる始末であった。雑多な説明は、世界観解釈のうえで有力なヒントとなりうるが、そのようなヒントを得て与那国島のモデルとしてそれを再解釈してゆくうえには、やはりわれわれの論理が必要なのである。

ダイアグラムとモデルとは、生活者と研究者との相互の主観的な対話の場である。今後は、このような操作をより確実にするいみで、より多くの「意識的モデル」を発見せねばならないであろう。研究者の論理になりつつモデルといえども、生活者のモデル（研究者のダイアグラム）を無視するわけにはいかない。その他数ある「民家」の問題を解くうえで、将来の研究に画期的な成果を期待しておきたい。

(注)

- (1) 大胡欽一は、筆者の発表資料をもとに、居住空間の象徴的分割に対応する家族の動態、および動態にもなつて散開する親族関係のひろがりや世界観的秩序を、ひろく「シマ」社会の社会構造としてとらえ、新しい見解を披瀝している(1973: 34)。笠原政治は、深い知見と沖縄・八重山群島における長期調査から、伝統的家屋の構成にかかわる方位を中心としたいくつかの世界観的規準を抽出し、琉球世界観の研究に、家屋研究の占める積極的な課題を与えている(1974: 176-190)。鈴木正崇は、波照間島(八重山群島最南端)の例に発し、世界観の一般化を試みるなかで、住居空間の方位観に触れ、筆者の「塑形的モデル」を発展させて、信仰・儀礼から祖霊観・神話にかかわる「取斂モデル」を描出させている(1977: 35-41)。また筆者自身も、本報告を要約し、新たな試論展開をこころみしてきた(1973, 1975)のは、本論の語るところである。
- (2) 筆者を研究代表として行なった与那国島の共同調査による。この調査は「沖縄最西端与那国島の伝統文化と外来文化——周辺諸文化との比較研究——」と題し、昭和五三年度文部省科学研究費補助金による助成をおおいだ。
- (3) 発表当時は、トカラ列島を加味しなかった。それはこの研究が民家の建築学的研究であるより、沖縄の世界観を分析する手段として「民家」をとりあげようとしたためであり、宗教世界を共有する奄美大島以南を扱おうとするためであった。トカラの宗教がどの程度、奄美以南と共有する世界をもちうるか全貌は定かでないが、宗教価値からも建築学上からもとりあげるべきであることは、本論に引用した指摘によつていえる。
- (4) 「自然方位」の再認識は、ひとつの大きな成果である。しかし、この概念は何が「自然」であるか、と問うた場合非常に問題が多い。慣用上、この用語で通すことにするが、より正確には「地理学的方位」とすべきものである。
- (5) 沖縄文化地域の家屋は、桁行と梁行との長さを同等にした例を、今日あまりみない(cf. 野村孝文 1961: 221-222 ほか)。ただし、このような方形平面であり、かつ分棟的性格を有していたのがこの地域の特徴であったとされる(野村 1961: 87, 153)。今日「残存」する正方形の家屋(2.0間×2.0間、2.5×2.5、3.0×3.0)は、必ずず付帯家屋を有するのが通例である。野村によれば、「主屋規模は一般農家では江戸末期から明治初期には2.0×2.5のものが通

常であった」(1961: 90)という。このように、この地域の通常の家屋は△長方形▽(矩形)をなしており、野村の採集例を集約してみると、以上のような矩形比をもつ家屋がほとんどであった。

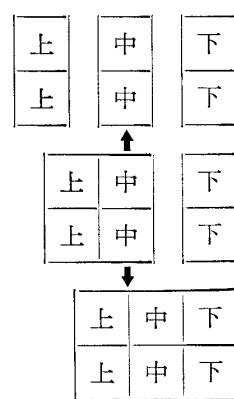
- 1.5×2.0=1:1.33 2.5×3.5=1:1.40
- 1.5×2.5=1:1.66 3.5×4.0=1:1.14
- 2.0×2.5=1:1.25
- 2.0×3.0=1:1.50
- 2.5×3.5=1:1.20

沖繩文化地域の家屋がなぜ矩形を標準としているのか。まったく仮説の域を出ないが、やはり沖繩文化地域といえども、家屋は△調和▽を根本とした構造物として、無意識のうちに矩形を至上としたのではないかと考えるのである。調和とは「部分が全体に及ぼす合法的関係」(柳 1965: 12)であり、世界観に應用すれば、部分的象徴が全体に及ぼす意味の連合関係であり、矩形の調和が世界観の存立基盤であることは疑う余地がない。もしも、家屋の矩形がこのように黄金比である1:1.618というφ矩形に近似している、ということがいえるとするならば、屋敷地における矩形調和をふくめて、沖繩文化地域の家屋空間は、△美的空間▽として再認識する必要があるのではなからうか (cf. 柳 1965: 16)。

(6) E群の例は、筆者の調査した沖繩本島北部東村字平良・字川田などに多数あるが、まだ筆者自身が未報告なのである。理由はもっぱら道路事情と、宗家(ムートウヤー)に背を向けてはいけない、などという理由によって、それなりの△意識的▽理由がある。

(7) 沖繩文化地域の間取り(平面分割)が、田字型を基本としていることは、本論でも触れたように、筆者も認めるところである。そこで、馬淵東一・村武精一両氏その他から、サ字型平面分割に関し、疑義が出され、多くの教示を受けていた。そうしたこともあって、本論は未刊のままでもあった。しかし、このダイアグラムは、実質的には間取りだけを示すものではない、という再認識をした次第である。ことに問題となる下下部分は、A-4図というkk部分であり、かつA-2図という三番座であり、あるいはA-5図というトウグラである。沖繩文化地域の民家配置が別棟型であり、間取りが田字型を基本とするなら、モデルは、そのすべてを保証せねばならない(本論指摘)。実際にサ字型間取りがあることは、別棟型から同棟型へ△論理▽上移行したためであるし、

田字型間取りの民家には、必ず別棟型となるのがこの地域の特色である。奄美の多棟型民家も別棟型の△論理▽上の移行にすぎない。したがって、下下部分



には、同棟・別棟・多棟の変化を問わずおかれるであろう平面を必要とする。A-4図のkk部分は、それを保証している。以上の論理から、筆者はモデルに△サ字型平面分割▽を採用している。

(8) 沖繩文化地域の多くは、たとえば家屋建造の手始めとして「先づフンシミー(風水見)と称して位置・方角などを検し、次にビュリミー(日選見)と称して吉日を選定する」(宮良 1971: 119)などの手続きがある。フンシミー、すなわち方位定めは、民間的方位観の具体的表現である。それがダイアグラムに色濃く反映することはいうまでもないが、これをモデルの問題として考える場合には、その手続きがどうであれ、研究者側の論理上の手続きが先行することは、本論で触れたところである。レヴィ・ストロースの言を借りれば、民間的方位観は△意識されたモデル▽の範疇にふくみいられるものであろう。そして、研究者側の論理は、そこに△無意識のモデル▽をみいだす手続きに属するものである。かれもいうように△自家製のモデル▽は、少なくとも研究者のモデルに接近する道を与えてくれる可能性のあるものである。しかし、△意識のモデル▽が△無意識のモデル▽にとって、どれだけ実在を示すものかは、疑がってかかる必要がある、おしなべて△意識のモデル▽が論理上すぐれている、というわけではない (cf. Lévi-Strauss 1958: 273-275)。

(9) 数年前、国際基督教大学において『民間天文学と民間地理学』と題し発表したことがある(渡辺 1974: 1-5未刊)。それは Baldusらの南米インディアン諸族の世界像の報告(1968: 16-21)や Gossenの中米インディアンの世界観の報告(1972: 135-153)および Bailyの考古天文学(1973: 389-419)の

Schmeidler の世界観史 (1962: 1—92) などによって、諸研究を天文学的思考の分析、という目的を以て再解釈しようとするものがあった。いまだに未開発のジャンルでもあり、手がけたとは思っていないものの、▲時▼の制約がそれを許している。

参考文献

- BAITY, E. C. 1973 Archaeoastronomy and Ethnoastronomy so far. in *Current Anthropology*. 14—4
- BALDUS, H. 1968 Vertikale und Horizontale Struktur im Religiösen Weltbild Südamerikanischer Indianer. in *Anthropos*: 63
- COHEN, P. S. 1966 Models, in *British Journal of Sociology*. 17
- CUNNINGHAM, C. E. 1972 Order in the Atoni House. in *Reader in Comparative Religion: An Anthropological Approach*. (Lessa, W. A. and E. Z. Vogt eds.) 3rd ed. Harper and Row: New York.
- GOSSEN, G. H. 1972 Temporal and Spacial Equivalents in Chamula Ritual Symbolism. in *Reader in Comparative Religion: An Anthropological Approach*. (Lessa, W. A. and E. Z. Vogt eds.) 3rd ed. Harper and Row: New York.
- 比嘉春潮 一九五九 「沖繩・衣食住の生活」『日本民俗学大系』一二 平凡社
 一九七〇 『新稿・沖繩の歴史』三二 書房
- 平山輝男 一九六八 「南西諸島の言語と文化」『地理』五 古今書院
- 平山輝男編 一九六九 『薩南諸島の総合的研究』明治書院
- 外間守善 一九七一 「沖繩文学の展望」『沖繩文化論叢』四 平凡社
- 伊礼百合子編 一九六六 a 『沖繩民俗』十二 琉球大学民俗研究クラブ
 一九六六 b 『沖繩民俗』十一 琉球大学民俗研究クラブ
- 石原憲治 一九五八 「日本の民家」『郷土研究講座』三 角川書店
- 鹿児島民俗学会編 一九七〇 『かけろまの民俗』第一法規出版
- 狩俣敏夫編 一九六九 『沖繩の民俗』十七 琉球大学民俗研究クラブ
- 笠原政治 一九七四 「琉球八重山の伝統的家屋——その方位と平面形式にかんする覚書——」『民族学研究』39—2
- 蔵田周忠 一九五八 「家づくり」『日本民俗学大系』六 平凡社
- LEBRA, W. P. 1966 *Okinawan Religion*. Univ. of Hawaii Press: Honolulu
- LÉVI-STRAUSS, C. 1958 *Structural Anthropology*. (Tr. by Jacobson, C. and B. G. Scheepf) Anchor Books: New York.
- 馬淵東一 一九五二 「沖繩と台湾——伝承における関連と無関連——」『民間伝承』16—9
- 1968 Toward the Reconstruction of Ryukyuan Cosmology. in *Folk Religion and the Worldview in the Southwestern Pacific*. (Matsumoto, N. and T. Mabuchi eds.) The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies: Tokyo.
- 一九七一 「解説」『沖繩文化論叢』三 平凡社
- 明治大学社会学関係ゼミナル編 一九七一 『社会学関係ゼミナル報告』七
- 嶺井敏子編 一九六七 『沖繩民俗』十三 琉球大学民俗研究クラブ
- 宮良当壮 一九七一 「琉球諸島における民家の構造及風習」『沖繩文化論叢』二 平凡社
- 村武精 一九七一 「沖繩本島」名城の descent・家・ヤシキと村落空間」『民族学研究』36—2
- 中根千枝 一九六一 「南西諸島の社会組織 序論」『民族学研究』27—1
- NEEDHAM, R. 1962 *Structure and Sentiment: A Test Case in Social Anthropology*. The Univ. of Chicago Press: Chicago.
- 野村孝文 一九六一 『南西諸島の民家』相模書房版
- NUTINI, H. G. 1968 On the Concepts of Epistemological Order and Coordinative Definitions. in *Biiragen Tot de Taal- Land- en Volkenkunde*. Deel 124.
- 大胡欽一 一九七三 「概説Ⅱ・沖繩の社会構造——時間と空間に関連して——」『沖繩の伝統と文化』至文堂
- 奥村幸己編 一九七〇 『沖繩民俗』十八 琉球大学民俗研究クラブ
- 琉球政府文化財保護委員会編 一九七〇 『沖繩の民俗資料』一
- SCHMEIDLER, F. 1962 *Alte und Moderne Kosmologie*. Duncker und Humblot: Berlin.
- 島袋源一郎 一九三七 「琉球列島における民家の構造とその配置」『南島論叢』伊波普猷還暦記念論文編纂委員会
- 下野敏見 一九六六 『吐喇喇列島民俗誌(悪石島・平島編)』一文照社
- STEWART, J. H. 1955 *Theory of Culture Change: the Methodology of*

Multilinear Evolution. Univ. of Illinois Press: Urbana.

鈴木正崇 一九七七 「波照間島の神話と儀礼」『民族学研究』42—1

竹内 謙 一九六九 『喜界島の民俗』黒潮文化会

TANBIAH, S. J. 1970 *Buddhism and the Spirit Cults in North-east Thailand.* Cambridge University Press: London.

桃原茂夫編 一九六八 『沖繩民俗』十五 琉球大学民俗研究クラブ

一九六九 『沖繩民俗』十六 琉球大学民俗研究クラブ

鳥越憲三郎 一九六五 『琉球宗教史の研究』角川書店

渡辺欣雄 一九七一 a 「沖繩北部一農村の社会組織と世界観」『民族学研究』

36—2

一九七一 b 「沖繩の世界観についての一考察」『日本民俗学』七八

・須藤健一 一九七三 a 「奄美」『沖繩の民族学的研究』民族学振興会

一九七三 b 「沖繩の世界観についての一考察」『沖繩の伝統と文化』

至文堂

一九七四 「民間天文学と民間地理学」国際基督教大学人類学研究

会・未刊

・伊藤幹治 一九七五 『宴』弘文堂

一九七八 「沖繩の世界観についての一考察」『日本祭祀研究集成』

二 名著出版

柳 亮 一九六五 『黄金分割——ピラミッドから ル・コルビュジェまで——』

美術出版社

〔昭和五十三年十一月二十三日改稿欄筆〕